終わりにかえて

この「人権にかかる保育マニュアル」は子どもにかかわる保育所・幼稚園の職員や保護者や地域の方々に活用していただけるよう内容を検討し、構成しています。このマニュアルは、今まで同和保育（教育）のなかで取り組んできた「一人一人の子どもを大切にし、豊かな人格形成をめざした取り組み」が基礎となっています。

これからも少子化の進行等、子どもを取り巻く環境は変化していくと思われます。それにともない、子育て不安などが増え、ますます子どもを産み、育てにくい状況のなか、子育てを支援していくことは重要であり、保護者同士をつないでいくネットワークづくりがますます大切になります。今、あまりにも多い青少年にかかわる事件に、私たちは子どもを責める前にそういう事態をつくりだしてきた社会を考え、大切な乳幼児の子育てをみなさんと一緒につくりあげていきたいと思います。

このマニュアルには、保育所・幼稚園の職員の方々の保育の質を向上し、人権にかかる保育の推進を進めるというねらいがあります。「保育にたずさわるすべての人が自分の生活の中においても弱い人の立場に立って物事を考え行動しているか」「目の前の子どもたちの育ちを１０年後、２０年後を見据えた観点で保育が進められているか」をお互い点検し合いながら、保育所・幼稚園においても、家庭においても「人権を大切にした」保育を進めていかなければなりません。

また、このマニュアルの中では地球環境のことについてふれています。子どもたちに「きれいな環境」を私たち大人が残す努力をしていかないと、子どもたちの成長や命にもかかわっていくからです。私たちの出しているゴミや生活排水を「自分一人ぐらい」という気持ちでいると大変な結果となります。反対に自分一人からでも「環境を汚さないでおこう」という考え方は大きく社会を変えていくことができます。このことと同じように子育ても、人や命を尊ぶということも、一人一人の実践やつながりが大きな力になります。

なお、事例として挿入してあります「実践例」は、あくまでも一つの例ですので参考として活用してください。まだまだ不十分な点も多いと思いますが、それは皆様の保育実践や子育ての体験で補っていただき、この人権にかかる保育マニュアルを大きくふくらませて活用していただき、未来を担う子どもたちのために役立つよう願うところです。

実 践 例

実践例 1　子どもの最善の利益を守る保育をめざして …… 115

実践例 2　自然環境を通して、遊びを広げる …… 118

実践例 3　「だいじょうぶだよ」 …… 120

実践例 4　「うわあ！大きいなあ」 …… 121

実践例 5　「やった！跳べた！」 …… 123

実践例 6　子どもの主体性と意欲を育てる環境保育をめざして 124

実践例　1

子どもの最善の利益を守る保育をめざして

私は４月に３歳児のクラスを担任することになりました。

でも、思うように子どもたちとコミュニケーションをとることができず、毎日、「なんで言うこと聞いてくれへんのやろ？」と悩んでいました。

そんな私に先輩が「あせる気持ちも分かるけど、子どもたちの心の中、のぞいてる？」と聞かれました。私は、その意味が分からず戸惑っていました。

私のクラスにはリーダー的な存在のＡ児がいました。Ａ児は自分の思いを主張しすぎる面があり、注意すると「プイッ」と横を向いてすねてしまい、私の話を聞こうとはしませんでした。

私も無理に聞かそうという思いでＡ児に強くでてしまう毎日でした。そして、あげくの果てにはＡ児に「先生なんかきらいや。」と言われ愕然としてしまいました。

そんな私の保育を見て先輩の先生方は、「子どもが嫌いやって言うのは、好きの裏返しやで、Ａちゃんは、先生に受け止めてほしいんやで。」とアドバイスしてくれたのですが、毎日の保育に精一杯で、なかなかＡ児の気持ちを受け止めることができずにいました。

そして、年度末の３月を迎え、所長から「側面からもう一度、保育を見直すことも大事だと思うから来年度はフリーという立場で子どもの様子や背景、保育内容などを見直してはどうか。」と言われ、新年度からフリーの保育士として仕事をすることになりました。

４歳児クラスに登所しにくいＢ児がいました。欠席が多いことから担任の先生と連携を持ち、Ｂ児の家に家庭訪問に行ったり、朝、登所が遅いと電話をしたり、連絡が取れないと家庭訪問に行ってＢ児が保育所に来れるように支援していました。

最初、先輩の先生と一緒に行き、Ｂ児のお母さんとの連携の取り方を教えてくれましたが、いざ一人で家庭訪問に行くことになると「Ｂ児を起こして連れて来れるかな。」「鍵が閉まっていたらどうしよう。」と心配でたまりませんでした。

でも勇気を出して一人で家庭訪問に行き「おはようございます。」と大きな声で呼びかけました。しかし返事が無く「どうしよう。」と思ったとき、「今から行くとこやった。」と姉が出てきたので、お母さんに声をかけＢ児を保育所へ連れて行きました。

こんな日が続いた時、Ｂ児の母親から「家に来てほしくない。」と言われました。

私は担任や先輩の先生とも連携し、Ｂ児の母親にはＢ児や母親のことを心配していることなど、こちらの思いを伝え、分かってもらうために毎日かかわり続けました。

Ｂ児の家に電話をしても出なかったり、迎えにいっても出てこなかったりといろいろな日がありましたがある日、Ｂ児を迎えに行った時、お母さんが「先生、毎日ありがとう。」と声をかけてくれました。

私は、うれしくて保育所に帰ってすぐ先生たちに報告しました。そして所長から「信頼関係を築き一所懸命、接することで保護者は分かってくれる。私達の仕事は、うわべだけでこなせる仕事ではない。今の気持ちや経験を忘れないように。」とアドバイスしてくれました。同時にこのようなことに気づかせてくれたことに本当に感謝したいと思いました。

そしてフリーの保育士として仕事をする中、私は昨年、担任していたＡ児の思いに気づくことができたのです。

振り返ってみると、Ａ児は母親が働いているため祖母が毎日の送り迎えをしており母親は、ほとんど保育所に来ることは無く保育参観の時も祖母が来ていました。

Ａ児は「お母さんと一緒にいたい。」「触れ合いたい。」という思いが強く、寂しかったのに、自分のことで精一杯の私は、その思いを受け止めきれずにいました。そして「先生、私の思いわかってよ。」と信号を送り続けていたＡ児の思いに気づかなかったことをとても反省しました。

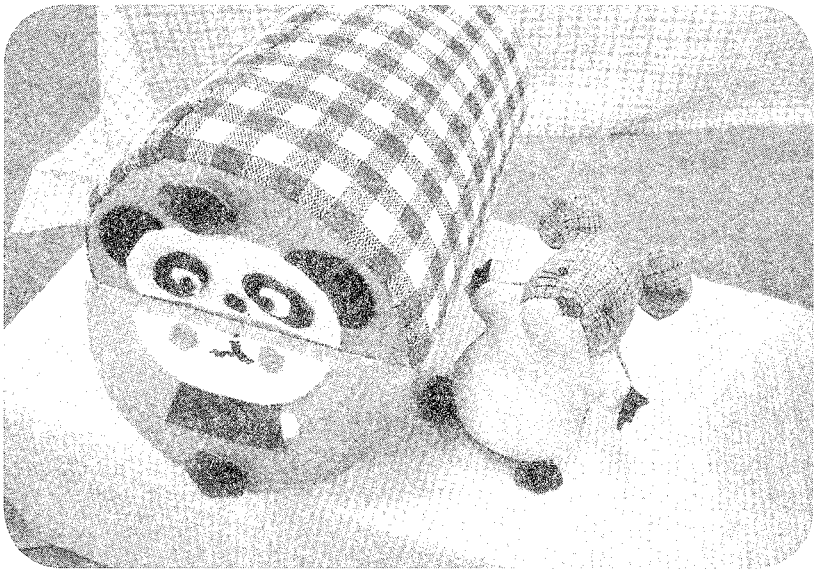
「一所懸命保育していても自分本位の保育では、なんにもならない。子どもたちの心の中や保護者の気持ちを感じとる保育。それが今、保育所が目指している保育なんだ。」と改めて感じることができました。

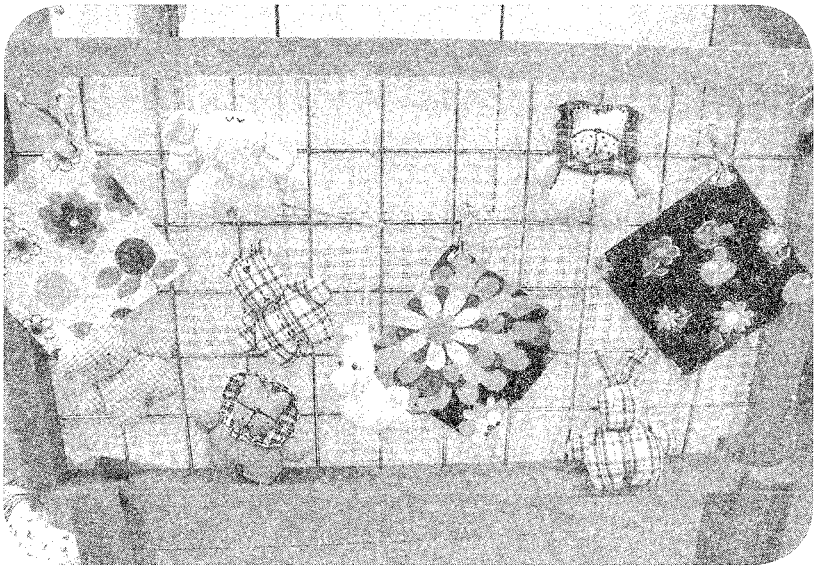
今、Ａ児は、５歳児です。私は、少しでもＡ児の思いに寄り添いたいという気持ちで毎日かかわっています。そんな中、Ａ児を担任していた時にＡ児から「先生なんかきらいや。」と言われたのに、ある日、Ａ児から「先生、大好き。」と言ってくれるようになりました。

クラスから離れてみて、同僚の先生が保育する姿や子どもたちの姿が少しずつではありますが、違った角度から見えるようになってきました。

そして、所長が話してくれた「今年一年、側面から保育を見る」という大きな意味がわかり、そのことに少しでも近づけたように感じます。

これからも、子どもたちの最善の利益が守られるよう、保育者一人一人が資質を磨き、向上していける保育所でありたいと思います。





実践例 2

自然環境を通して、遊びを広げる

当保育所は、市の中心部に位置し、道路事情も良く大変便利な場所にあります。住宅の開発が進みマンションやニュータウンが増え、子どもの在籍数も多いです。本所の周りも住宅や道路で囲まれており、遠くに出かけないと自然と触れ合う機会がもてない都市型の保育所で、菜園活動や小動物の飼育観察が自然体験の中心でした。また、子どもたちは車での登所が大半で帰宅後、外で遊ぶ時間も場所もない環境の中で日々過ごし、心を動かすような実体験が少ない傾向にありました。

自分たちの周りには「本当に自然がないのだろうか。」「気がつかないだけなのか。」と考え周辺の自然を見直すために「自然環境」に取り組み始めました。

自然環境に取り組むまでの子どもたちは植物や生き物を捕まえ、友達とその数を競い合ったり、戦わせたりすることに夢中になっていました。当初、園庭を見まわしても無機質で感動やほっとする環境はほとんどありませんでした。そこで、様々な体験ができるよう、自然を呼びこむ環境として「グリーンガーデン」「フラワーロード」「ビオトープ」「鳥のえさ場」などを作りました。

すると子どもたちは、それぞれのエリアで虫探しをしたり、育てた草花を使って遊んだりし始めました。生き物に対して自分中心の関わり方をしていた子どもたちは、自然に近い環境の中で暮らすほうが生き物にとっては嬉しいことだと感じるようになってきたのです。

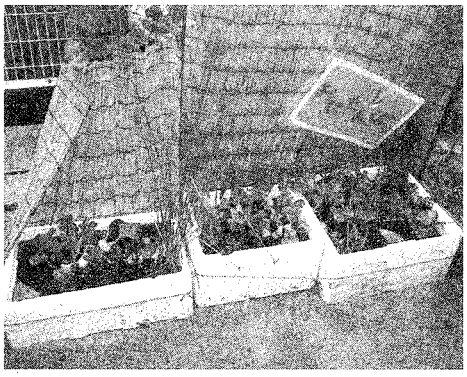
そして、カマキリの産卵やハリガネムシの出てくる瞬間やクサガメの孵化など、保育士も子どももたくさんの感動の場面に出会うことができました。子どもたちは、ビオトープやバッタハウスで暮らすほうが生き物にとっては嬉しいことなんだと思えるようになってきました。

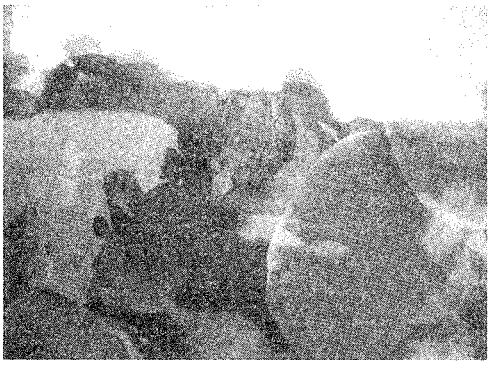
自然というフィールドには、限りない発見と驚きがあります。また、体を使って遊び、試したりすることもたくさんあり、心も体も解放されます。自然体験は、子どもたちのもっていたものをたくさ

ん引き出してくれます。

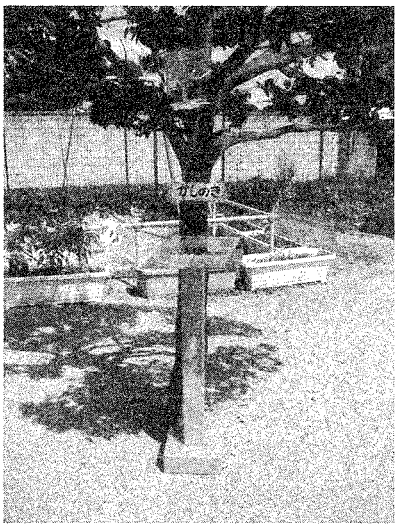
今まで心の中で溜めていた思いを言葉で言えたこと、発見を友達に認めてもらったこと、苦手な虫を捕まえたこと、土手を登ったり降りたりしたことで「自分にもこんな力があったんだ。」と自分発見にもつながったり、自信が持てるようになったことなど沢山の子どもの育ちがありました。

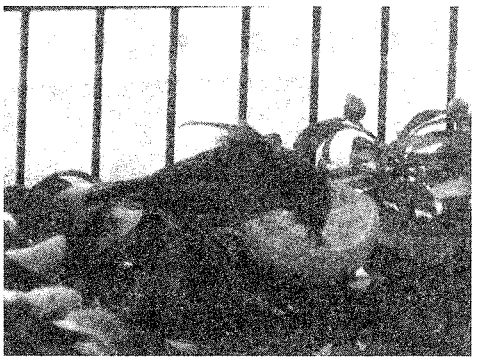
今後更に、自然との体験を土台に、自分そして他者や生き物を大切にできる心を育てていきたいと思います。そして私たち保育士も自然を通して何かを教えなければならないと気負いせず、子どもたちの目線に立ち、子どもと共に感動し、共に生きていくすばらしい体験をこれからも継続してできるよう自然環境を始め、保育の様々な環境を研究していきたいと思います。





ビオトープでは、オタマジャクシからカエルになり、ここでカエルが暮らすようになった。
時々ビオトープから飛び出して餌を探しに行くのかいなくなり、またいつの間にか戻ってくる。
そしていつの日か帰ってこなくなった。冬眠したのか・・・？





いろいろなしかけやきっかけをつくった。
ついに　メジロがきてくれました。

実践例 3

「だいじょうぶだよ」

当保育所では絵本を通じて子どもたちと一緒に人権について考える「お話の会」に取り組んでいます。この「お話の会」は、年間計画に基づいて、年齢ごとに担当保育士がクラスを回りながら、絵本の読み聞かせをするというものです。

この絵本活動は、①子どもとのつながりを大切にし、子ども一人一人への理解へとつなげる。②子どもの絵本に対する興味や関心を探る。③保護者への啓発と連携を大切にするなどを目的としています。

また、保護者を対象にした「親子でお話し会」も実施し、親子で絵本に触れて一緒にその時間を共有しながら、絵本の持つ心地よさを感じてもらうことを主なねらいとしています。

その中で自己表現が苦手で、言葉数が少ないＡ児のことが気になっていました。A児は１人でいることが多く、行動も消極的で、感情をストレートに表出できにくい子どもで、不安感が人一倍大きいのではと感じていました。

Ａ児に絵本を媒体にして保育士が積極的に関わっていき、「だいじょうぶだよ。」「失敗したっていいんだよ。」「Ａちゃんのこと大好きだよ。」というメッセージを伝えることができれば、少しでも安心感を持つことができるのではないかと考えました。

「お話の会」以外にもA児と一緒に絵本を見る時間をもつなどしている中で、A児のお気に入りの絵本がわかり、その本を保育士とA児が一緒に見ていると回りに１人、２人と友達も集まってくるようになりました。

保護者には、Ａ児の絵本を見ている時の楽しそうな様子をこまめに伝えるように心がけました。やがてA児は、好きな絵本に出会ったときに声を出して笑い、素直に感情を表出し、これまであまり見たことのなかった姿を見せるようになりました。

また、母親が忙しいとのことで、これまで参加できなかった「親子でお話し会」にもＡ児が母親を誘って参加するようになったのです。

子どもの心に寄り添うことの大切さや、一人一人を認め受容することが子どもの変容につながり、親の気持ちも変容させることができるのだということをこの実践を通して学びました。

実践例 4

『うわあ！大きいなあ』

4歳児クラスで奈良公園へ遠足に行き、東大寺の大仏殿を見学しました。

大きな大仏を前に、子どもたちは「うわあ、大きいなあ。」「こっち見てるみたい。」とひっくり返りそうになりながら驚きの声を挙げていました。

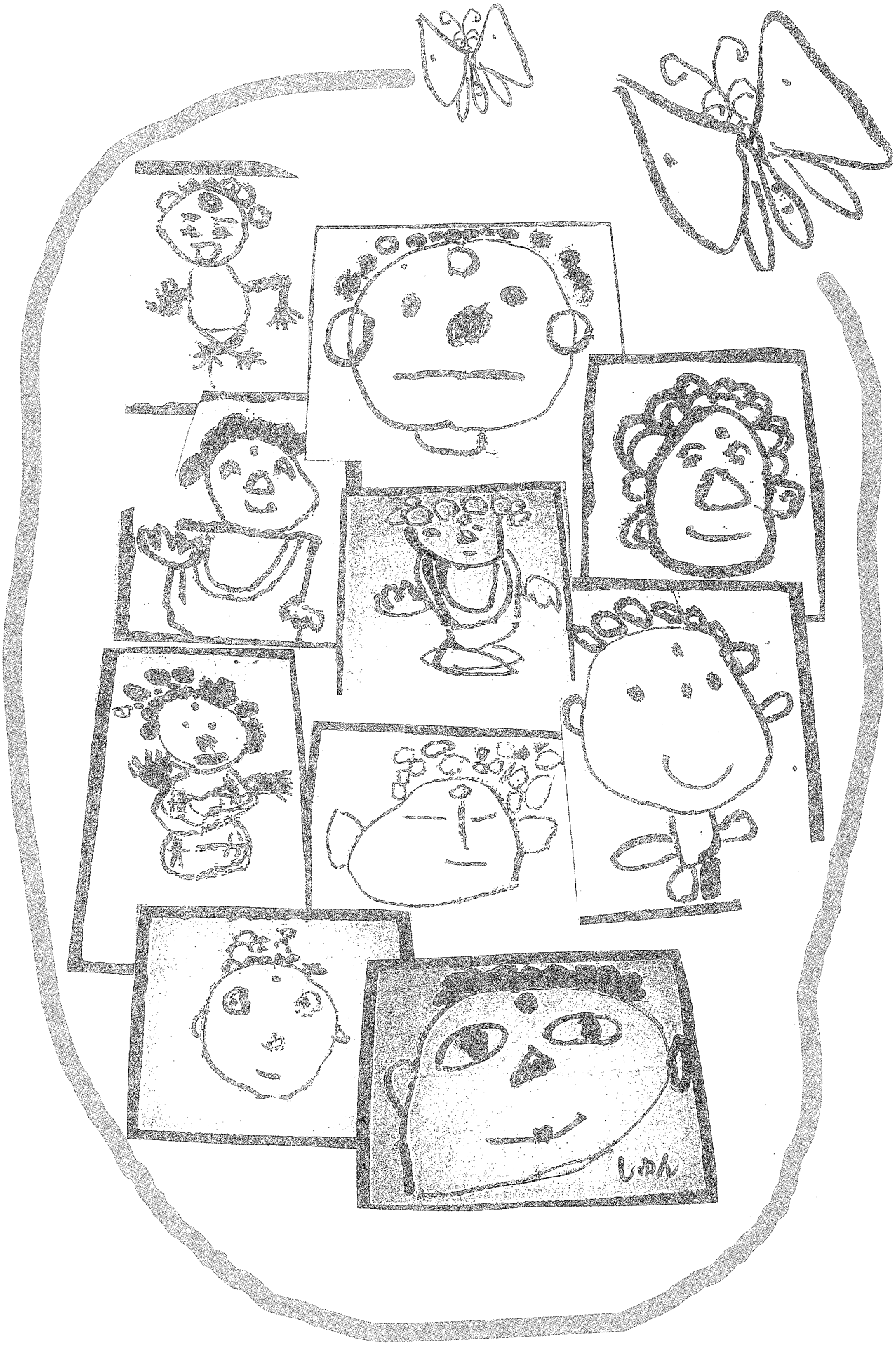
「本当に大きいなあ。みんなのこと上から見守ってくれてるんやで。」「戦争が起こりませんように。平和でありますようにって祈ってくれているんやで。」と、保育士が言葉をかけると、「みんなのこと、守ってくれてるんかあ。」と子どもたちはじいっと見上げていました。

そして大勢の観光客が大仏に手を合わせている姿を見て、同じように「元気でいられますように。」と手を合わせ、子どもなりに何かを感じたようでした。

次の日に、墨汁を使って大仏を描く事にしました。

大仏様のことを改めて子どもたちに尋ねてみると「大きかったなあ。」「頭くるくるしてたなあ。」「みんなのことを見て、『幸せになりますように』って、守ってくれてるんやなあ。」と話す子どもや「手は、こんなんやったなあ。」と大仏の真似しながら描く子どもなど、口々に思ったことを話しながら、子ども一人一人の感じた大仏様ができあがりました。

子どもたちの会話からは「大仏様は幸せや平和を願ってくれている」ということが大きく印象に残っているようでした。あどけない会話を聞いていると、子ども一人一人が幸福になり、将来、平和な社会を築くための社会人となってくれるよう、その基礎を培っていく保育を様々な人たちと力を合わせ、進めていきたいと強く思いました。



実践例 5

「やった！跳べた！」

運動会を数か月前に控え、元気いっぱいの５歳児クラスの子どもたちが、運動会で「やってみたい！」「やるぞ！」と子ども自らが挑戦意欲をかき立てるような運動にはどのようなものがあるかと考えていました。

５歳児の発達段階に合った「跳び箱に挑戦してみよう。」と考え、早速子どもたちと一緒に準備をしました。準備すると同時に跳び箱に跳び乗って遊ぶ子どもたちの姿がありました。しかし、なかなか跳び越すというタイミングやこつがつかめず、「踏み板でしっかり足を踏んで、次は跳び箱に両手をついて最後に飛び越して！」「もっとしっかり手を突いて思い切り！」と保育士が言ってもなかなか動きが伝わりません。また、保育士が実際に跳んで見せても「１、２、３」のリズムがつかめず、飛び越えることができません。

「どうしたら跳ぶということを子どもたちがイメージできるのだろう。」と考えましたがなかなかいい方法がみつかりません。

子どもたちの中には跳び箱を跳べる子はいましたが、その子の姿を周りに見せても分かりにくい様子でした。

そんな時に保育所保育指針のDVD視聴の勉強会があり、そのDVDの映像の中にタイミングよく５歳児や小学校の子どもたちが跳び箱に取り組んでいるシーンが目に飛び込んできました。

「これだ！」「これを子どもたちに見せよう。」と思い、すぐに子どもたちと一緒にそのＤＶＤを視ることにしました。子どもたちは「わあ、すごい！」と言いながら、じいっと見入っています。

映像を見終わったとたん「先生もう一度跳び箱しよう！」「したい、したい！」と子どもたちから一斉に声があがり、再び挑戦が始まりました。そして何度か跳び箱を跳んでいるうちに、４～５人の子どもが次々と跳べるようになり、「やった！跳べた！」と大喜びの子どもたちにつられ、跳べる子どもがどんどん増えていきました。

DVDを視て「あんなふうに跳びたい。」とイメージがもてたことが「跳びたい。」「跳べる！」という意欲につながったり、跳びこすことに自信がつきチャレンジするという気持ちが育ったように思いました。

実践例 6

子どもの主体性と意欲を育てる環境保育をめざして

本所では開所以来、次のようなことを中心に保育内容を創造してきました。

- 健康でしなやかなからだ育て（からだぐるみのかしこさを）
- 言語（0歳からの言葉育ち）
- 音楽リズム（からだ、ことば、リズムをひとつに）
- 造形（一人一人の表現を大切に）

何年間か取り組むなかで、一定の成果は得られたもののどこか変わりきれない子どもの姿がありました。それは、

- 心が落ち着かず、どこか不安な気持ちを抱えたまま登所してくる。
- 登所後も落ち着かず、集中して遊ぶことができない。
- 自分の気持ちを言葉にして伝えることが苦手なため、トラブルになった時にたたいたり、蹴ったりという行動が多くなる。
- 家庭のことや、保育所でのトラブルを一日中、自分の気持ちのなかに引きずり、切り替えることができにくい。　等

このようななか、「子どもの育ちを『保育環境』という面から考えてみませんか。」と、保育研究の専門の先生から提案を受け、子どもの意欲と主体性を育てる保育環境に取り組み始めました。

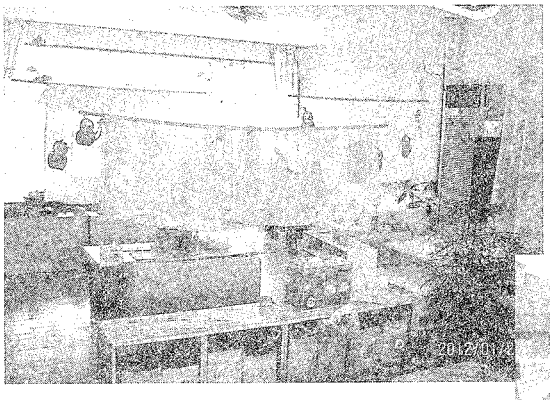
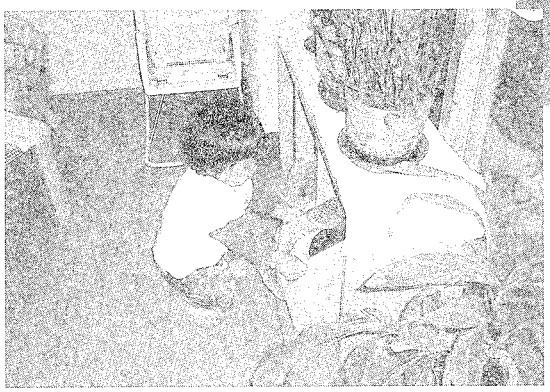
まず、「子どもの内面を育てる」ために、子どもの気持ちや情緒の安定を図り、意欲をもち主体的に遊ぶ「保育室をデザインする」ことを考えました。具体的には、子どもが保育所に来ると自分の居場所があり、不安な気持ちやモヤモヤした心がほっとする、気持ちが安定し自分で遊びを選び、落ち着いて集中して遊ぶことができる保育環境づくりを研究しました。

- 全体が見渡せる保育空間であること。（誰が、どこで、何をして遊んでいるか分かるように）
- 一人一人の違いを配慮する。
- 遊びと学びの空間を配慮する。（生活と遊びの空間を分ける）

　乳児　部屋の中での遊び、食事、着脱、睡眠の場所を分け、これらはいつも同じ場所で変わらない。

幼児　食事はレストラン（ランチルームで3，4，5歳児）
遊びの場所は、子ども自らが遊びを選べるように保育室をいくつかの遊びのコーナーに区切り、毎月のテーマに沿って変化するコーナーもある。
昼寝は3，4，5歳児で昼寝の部屋で寝る。（いつも同じ場所）

・保育所や保育室の中の規則や習慣が見えるようにデザインする。
【自分だけの場所がある】
子ども一人一人のシンボルマークを決め、ロッカー、靴箱、タオル掛け、椅子などに付け、また、遊びが途中で終わる時は自分のシンボルマークを置き、遊びに続きがあることが分かるようにする。
【一人一人の顔写真がある】
あなたは○○クラスの大切な一人です。
【玩具や素材】
遊び方が分かるように置いたり、時には保育士が仕掛けをしたりし、遊んだ後は自分で元に戻せるように写真や絵を貼る。
【1日の生活の流れが分かる】
子どもが時間の流れが分かるように絵や写真にし、手の洗い方やトイレの使い方等も順番が分かるようにしておく。

このような取り組みを通して子どもたちは人との関係も柔軟になり、気持も安定し、意欲を持って生活できるようになってきました。
意欲と主体性を育て、自尊感情を高めると言っても、具体的な保育内容や方法がないと子どもには伝わりません。「自分は大事にされている」という気持ちこそが「自分が好き」「自分は素敵だ」と思える自己肯定感につながります。
保育士の関わり方や働きかけが子どもの発達に大きく影響を与えることは言うまでもありません。一人一人の成長を知り、その子に応じた遊びを用意していくことが大切であり、何よりも保育士が子ども一人一人を大切に保育することが重要だと思います。
「自分は大事にされている」「いつも見守られている」と感じることで子どもは心も体も安定し、自尊感情も育ってきます。
時には自分の思いを言葉で表現せず、乱暴な言葉を投げ付けることもありが、これからも子どもたちの姿を通して保育環境を工夫し、子どもたちが「明日も保育園に行きたいなあ。」「友達と遊

びたいな。」と思える保育所づくりを目指して、さらに取り組みを進めたいと思います。